

サガルマータ登頂 —2人で楽しく気負いなく

渡邊 玉枝



南峰の手前で日の出を迎えた 後方はマカルー、ローツェ

エヴェレストに登りたいといっ頃から思い始めたのだろうか。8848 ㊦という高さは尋常ではない、とあるが、三座に登った経験から十分に想像された。決して安易に考えたわけではない。それでも60歳を超えた体力で、もし挑戦するならば今しかないという気持があつた。後に悔いを残さないためにはたとえ頂上には立てなくとも、挑戦することに意義があるのでと考えた。初めて行くエヴェレスト街道はトレッキングだけでも十分に楽しめるはずである。幸いに、行かないかと声をかけてくださる方がおり、トレーニングもしないまま図々しくも行ってみようと思った。

たった2人のエヴェレスト遠征隊が確定したのは今年の2月に入ってからのこと、極めて少人数、個人的

な隊でもあり、少数の友人に話しただけで、こっそりと出発した。

記録など意識する必要もなく、自分の歩きに徹し、楽しめる登山であればそれが一番だと思つた。登山許可その他エージェントとの交渉は隊長がすべてやってくれた。シェルパは3人を雇用、30代前半のサーターに20代のシェルパ2人、実に強力で頼もしく、心優しい人たちである。

BCは私たち日本人2人にフランス人女性1人、ロシア人男性1人、それにシェルパのウクライナ人男性3人(ローツェ隊)と一緒になつた国際隊のかたちをとつていた。

今年のBCにはエヴェレストを目指す11隊とローツェを目指す4隊の15隊が来ており、実に賑やかで、ラマ教の旗が閃いており、人数は300人を超えていたかもしれない。公

募隊も何隊かいたようだが、詳細は



2002年(平成14年)

7月号(No. 686)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL●<http://www.jac.or.jp>

e-mail●jac-info@jac.or.jp

目次

サガルマータ登頂……………1
 “自力率”計測のすすめ……………4
 四姑娘山主峰北西壁を初登攀……………5
 チョー・オユーへ日中女子合同登山……………6
 報告
 図書委員会・山岳史懇談会……………7
 集会委員会・屋久島宮之浦岳……………8
 92同期会・第16回山行「山研」……………8
 三水会・韓国シリーズ第5回……………9
 海外の山……………10
 Climbing & Medicine・11……………11
 支部だより
 秋田 信濃……………12
 岐阜 山梨……………13
 新入会員・図書受入……………14
 東西南北
 日本山岳会員として四世代続く家系／俳句・木暮翁碑前祭／俳句・ウエストーン祭／詩・ヒマラヤの少女／第4回森の勉強会……………15
 図書紹介……………18
 会務報告……………20
 INFORMATION……………22
 ルーム日誌……………23

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10~20時
水・金……………13~20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10~18時
ルーム夏期休業日……………8月10~18日

把握していない。今春ネパール側からエヴェレスト山頂を目指した日本人は我われ2人だけだった。

私たちはサウスコルまでは2人で行動、アタック日だけシエルパと一緒に行動した。ちなみにシエルパはC2(6450[㍎])からサウスコル(7986[㍎])まで30[㍎]の荷物を背負って6時間で登ってしまおうすごい人たちである。

■高度順化は順調

私は隊長が組み立ててくれたタクトイクスに従って順化も順調に行き、ペースも私に合わせて歩いていただけだったので、体調を崩すことなく楽しい登山ができた。初めは怖いと思っただアيسフールも回を重ねると梯子の通過も要領がわかり、でも歩くたびにルートが変わる実スリルのあるところだった。1回は水塔の崩壊、1回は大規模な陥没が私た

ちの通過直後に起こり、肝を冷やしたけれど被害者がなかったのが幸いだった。

BCは標高5350[㍎]、アيسフールの上にあるC1(6050[㍎])は2泊して順化した後撤取し、その後はBCから一気にC2(6450[㍎])まで上がった。C2からローツエフェースにへばり付いたようなC3(7300[㍎])まで最初に登ったときは6時間を要した。氷が硬くて大変だったが、下降はたったの1時間半。

2回目、この硬い氷の壁に取り付いた際、前後にガイドが付いたアメリカ公募隊の女性6名が登ってきた。ザイルに連なったこの人たちを見ると、その足取りも一様ではなく、かなり危なっかしいアイゼンワークの人もあり、エヴェレストにはこういう人たちが来るのかと大変驚いた。前後にガイドが付いているとはいえず、

見ていてとても怖い。もし1人がスリップしたら果たして止められるだろうか。この人たちはC3まで8時間かかったと後で聞いた。途中には休めるような傾斜は少なく、8時間もか

かったのではかなり疲労困憊だろう。この氷の硬さはアイゼンのごまかしが利かない。いくら公募隊でも氷雪技術くらいはマスターして来て欲しいものとの時は感じた。

C3は急斜面にあり、テントから移動するにもフィックスが必要、降雪があると雪崩の危険も大きい。4月30日、このC3から下降中の男性が1人滑落して死亡というニュースがC2にいた私たちところにも入った。強風の朝だった。あの硬い氷の斜面で滑ってしまったら、もう誰にも止める術はなかったに違いない。悲しいニュースだった。

私たちの計画で登頂は5月14日ごろから5月20日の間、予定を5月15日としていた。多分この間には好天のチャンスが訪れるに違いないという隊長の予測である。5月2日までには順化活動を終了してBCに戻り、5月3日から7日まで少しでも濃い空気を吸ってこようと下山することにした。3日ペリチェ(4280[㍎])で1泊、翌日はティンボチェ(4350[㍎])に移動して3泊した後、7日にはBCに戻った。

■サウスコルまで

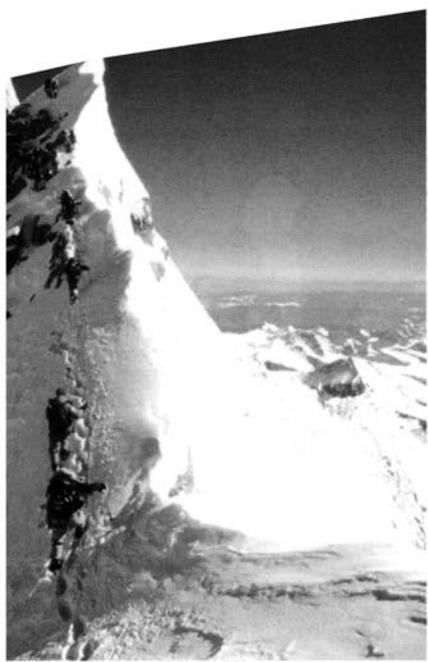
アタックは何日ごろか? 隣にベイスのあるスイス隊から5月8日に

気象情報もたらされた。それによると15日ごろまでは強風が続くとか。スイス隊は13日に予定していたアタックを延期するという。韓国隊もその日アタックを予定していたが、強風のためにC2まで下山して待機、場合によってはBCまで下りて来るらしい。ようやく好天の域に入ったようだが、強風はまだまだ続いており、しばらくは治まらない様子。私たちは当初のアタック予定日が15日だったので、BC出発は予定どおり12日にした。

12日、早朝はかなりの強風だったが、歩き始めてからは次第に風も弱まり、C2には1時半過ぎ到着。

13日はアタック時と同じ身支度でC2を出たが、無風快晴であまりの暑さに途中で繋ぎの羽毛服まで脱ぎ、ローツエフェースで大汗をかいてしまった。

14日、C3からサウスコルまでの行動は酸素(毎分1.5[㍎])を使用、今まで本で読んでローツエフェースはどんな斜面か、ジュネバ・スパはどんな岩稜かと想像しただけだったところを、実際に自分の足で確かめられる幸せにワクワクしながら足を運んだ。酸素マスクが大きくて邪魔になると時どき顎から外して深呼吸をする。今朝C2を出発したシエル



南峰への稜線を行く各国隊員(左が頂上)



パの速い人がもう私たちに追い付いてくる。ユマールのかげ替え点で待っている、皆一様にかんばつてとか、強いねとか、一声励ましの言葉をかけてくれる。ジュネバ・スパーは左側に大きく巻いてサウスコルに出るのかと思っていたら、フィック・ス・ロープが直上している。厳しいなど思いつつもシェルパさんたちの間に入つて懸命に登る。

12時過ぎにサウスコル着。強風のなか、無酸素でテント設営をひと張りだけ手伝うと、もう大変に苦しい。シェルパさんは手伝いはもういいからテントの中で休むようにと言う。お言葉に甘え、風を避けてテントの中に入る。早く着いた2人のシェルパが手際よく都合4つのテントを張り、しっかりと太いロープで固定していくのを、私はテントの中から何と頼もしい人たちだろうと眺めている。本当にこの人たちがいてくれる

からこそ私でもエヴェレストに来られるのだと感謝しつつ。

登頂にはサウスコルから山頂まで12時間かかる。そこから12時間かかる。アタック日は前日の夜9時から10時ころまでに出発

しなければならぬ。14日の夜8時ころからテントを叩く激しい風雪。これではとてもテントから出られない。アタックは無理、隊長がサーダーと話し、1日延期となった。周りにテントが10張ほど、どのテントも出発する様子はない。夜明けまでには雪は止み、風も弱くなって、15日は安定した好天となった。サウスコルに1日停滞となったが、私たちに良い休養日となり、かえつて好都合だった。

■満天の星空のアタック

取付の上部を見ると、5、6人の人たちが南峰バルコニーに向かってルートを開いている。かなりの積雪があつたらしくなかなか進まない。その夜は前日と打って変わり満天の星空、天の川もくつきりと見えて、星座の識別もできない私でもうつつりする美しい空だった。先頭に立つ

シェルパは大分早く出発していたらしいが、1日近い積雪に悪戦苦闘しており、3時間弱でルート上はへ追い付いた。たちまちルート上はヘッドランプの行列となり、真夏の富士山と見紛うばかり。ルート工作隊を待ちながら登る私たちは立ち止まり、ついでとろとろと眠くなる状態が続いた。

アタック時の酸素は2.5リットル、ゆつくり登っている分明るくなつてくると景色を眺めたり、写真を撮る余裕も生まれ楽だった。暗いうちはわからなかつたが、南峰への登りもかなりの傾斜である。日の出直前には地球は丸いということも実感され、こ来光の右には大きな山容が見えた。そのシルエットからカンチェンジュンガとわかる。シェルパさんはそうだし、そして日が昇るあたりはチベット平原だと教えてくれた。

ヒラリー・ステップも想像していたより高さはなく、フィックスがたくさんぶら下がっていたので、難しいという印象ではなかつた。これらの印象は私の登頂した日が類い稀なる好天であり、また登頂者の行列が続くような大量登頂者を出した日であつたということをつけ加えておかないと、誤解が生じてしまうかもしれない。頂上直下に9時30分着。

■世界一の高さで

山頂は20人近い人たちが喜びいっぱい顔でひしめき合っていた。なぜか皆ネパール側に固まっている。写真を撮っている隊長を待ち、一緒に山頂に立つ。チベット側から4年前に登頂している隊長にそのルートを尋ねると、そこにはまだトレースはなく、誰も頂上には達していない様子だ。たつた2人の隊なので、無線交信の必要もなく、記念写真を撮り、山頂のポールにタカを結び、何かお祈りすると良いと言われたが、登頂できた喜びのお礼だけに留めた。マカルとローツエは足下にあり、西方に少し離れてチョー・オユーも見える。その右には特異な山容のギヤチュンカン。すべての山が低く見えるなんてやはりここは世界一の高さなんだと妙な感動だった。次つきと登ってくる人たちにもう山頂を開け渡さなければ。シェルパさんたちもそろそろ下山を促す。

好天に恵まれた山頂、良きリーダーに恵まれ、そして素晴らしいシェルパさんたちにも恵まれた今回のエヴェレスト遠征は、厳しい自然環境の中での新しい体験も多く、当初の願い通り、気負いのない楽しい山行だった。

“自力率” 計測のすすめ

江本 嘉伸

2002年春のエヴェレストは新聞で言えば「社会的」話題で賑わった。5月号でふれたスイスと英国によるそれぞれの「半世紀記念」の挑戦は、5月16日にネパール側からスイス隊が、25日に英国隊が登頂し、歴史の順序(1952年スイス隊の頂上直下での断念と53年の英国隊の初登頂)でめでたく幕、となった。

年齢をセールスポイントとすると言ったら当事者は異を唱えるであろうが、「最高齢」「最年少」が話題となり、結果的に日本人がその「荣誉」を独占した。といって「最年少」は東大生、山田淳(あつし)が23歳9日で5月17日早朝に登頂、カルステンツ・ピラミッドを含む七大陸最高峰に最年少で立った、という意味だ。エヴェレストの登頂なら15歳のネパール少年がいる(余談だが、過度な年齢競争を戒めるため、ネパール政府は今春から16歳以下の少年少女には登山許可を与えない、と表明し

ている)。

渡邊玉枝の63歳はポーランドの著名な登山家、アンナ・チュルピンスカの50歳を大幅に超える記録であり、石川富康の65歳は昨年春のアメリカ人、シヤマン・ブルの64歳を塗り替える記録だった。一昨年の法政大学隊・山本俊雄の63歳を上回ったわけで、世界的な長寿を誇る日本が、健康年齢でも大した結果を出したことになる。

しかし、いまさら言わずもがなのことだが、登山とは自分の力で頂上に達し、自分の力で無事麓まで下りることである。その点、石川富康には問題があった。

石川は、94年に愛知学院大隊に参加してネパール側から登頂しており、今回は、チベット側からのエヴェレストを実感したい、との思いで登山を計画した。この8年ずっと行動をとりにしている青年はじめ3人のシェルパで小さな隊を構成し、ただし、登山許可は宮崎勉を隊長とする桐生山岳会隊の

一員として取得した。

現代のエヴェレスト登山の特徴は、好天を待って、一斉に行動することだ。ことしは5月16、17日がそれにあたった。日本人でいえば、村口徳行と渡辺玉枝がネパール側から登頂したのは5月16日で、山田淳、石川富康、あるいは桐生隊の宮崎勉がチベット側から頂上に立ったのは、翌17日である。山田は、ラッセル・ブライスの公募隊のクライアントとしての登山だったが、昨秋チョー・オユーに登頂した時のパテが大いに参考になったらしく、シェルパ1人とともに6時間足らずでこの日一番乗り登頂、山頂でパソコンを開く余裕を見せた。低圧室訓練の成果である。これとは別に北海道日本勤労者山岳連盟隊は、18日と25日に分けて3人が登頂に成功している。

石川富康は、時間をかけて登り、正午過ぎ登頂したが、下山で自力下降が難しい状況になった。8700m付近で「オレはここでいい」と言い出して動かなくなり、シェルパたちに付き添われて高所ビバークする事態となった。「目が見えなくなった」と石川自身は回想

するが、シェルパも報告を受けた桐生隊も65歳の登頂者をどう無事下山させるか、緊迫した時間が続いたらしい。北東稜ルートの場合、8000mの生還劇の様子は、下から手にとるように見えるのである。翌日も本人は「もういい。死ぬ」と叫んで動かなくなり、結局担がれるようにして前進ベースキャンプまでおろされた。「登頂後の悲劇」とまでならなかったのは、ほんとうによかった。「シェルパたちが実に献身的に助けていましたね」現場に居あわせた宮崎は語る。「でも、正直言えばこういうのは登山とは言えないのでは。G2やチョー・オユーと同じく、エヴェレストはそういう山になってしまった……」

新聞には年齢ばかりが大きく報道されたエヴェレスト。石川富康は「最高齢登山なんか全然狙っていなかった。別のルートから登ることに意味を見出し、挑戦しただけ」と語り「でも、下山のことは反省しています。桐生隊の方々は迷惑をかけたし」と結んだ。

石川に限らず、どう登り、どう下山したのか。「自力率」問われているエヴェレストである。

四姑娘山主峰北西壁を初登攀

英国のミック・ファウラー (Mick Fowler)

中村 保

5月24日に東チベットの念青唐古拉山東部の偵察から戻ったら、ミック・ファウラーからEメールが入っていた。彼は英国の第一線の現役クライマーであり、最近、横断山脈から東チベットの山にかわり始めた登山家である。

中国・四川省の四姑娘山主峰(6250m)の北壁は1981年にアメリカ隊、1983年に日本ヒマラヤ協会隊が試登しているが、本格的なチャレンジは20年間の歳月を経て実現した。
以下、ミック・ファウラーのEメールを要約する。

中村保様

(前略)我われの登攀ルートの概略をお伝えします。

四姑娘山主峰のすつきりした1300mの花崗岩の北西壁は、幅約8mの氷の詰まった断層によって区分けされています。この断層

がメインの登攀ルートとなりました。登攀は2002年4月にポール・ラムズデン (Paul Ramsden) とミック・ファウラーによって行われました。登攀には6日を要し、2日かけて未踏の北稜を下りました。断層線の部分は約750m、極端に急峻で不安定な氷におおわれており、垂直な部分が多く、2か所でオーバーハンクしていました。いくつかのピッチはScottishのグレードでした。

我われはボルトや固定ザイルを使わずアルパイン・スタイルで登りました。ピバークが問題でしたが、並んで座ったまま宙吊りの状態でピバークしました。初めての経験でした。ひどく消耗し、2人合わせて20kgも体重が減りました。これも初めての記録です。

この登攀ルートはまぎれもなく私が今までに登ったもっとも素晴らしいルートのひとつです。そし

て、もっとも魅力的な山域のひとつです。あなたが送ってくれた写真が今回の山行のきっかけを作ってくれたことに感謝します。

Japanese Alpine Newsの最新号 (Vol.2 "To the Alps of Tibet")のあなたの紀行と写真からおおいに刺激を受けています。世界にはまだ訪れるべきところがたくさんありますね。

ひとつお願いがあります。今回の遠征の記録を英国のスポンサーに書きますが、そのレポートにあなたが送ってくれた地図と写真を使わせていただけないでしょうか。

(後略)

2002年5月14日

ミック・ファウラー

世界の登山界もそう広くないことがわかる。時を同じくして、クリス・ポニントンを誘って念青唐古拉東部の最高峰、セブ・カンリにかけたドクター・チャールス・クラーク (Charles Clarke) から情報交換をしたいとEメールが入っていた。この関連は別に書きたい。なお、この初登攀の記録は、雑誌「Rock & Snow」9月号に掲載されることになった。

「山の本」夏の新刊発売!!

四国の山を歩く

尾野益大 著 四六判 300頁 本体1,900円

四国の山々50余座を、史跡、植物、景観など山の個性に光をあてて案内する四国初の本格的ガイド紀行。

●再版出来

エベレスト 61歳の青春

川田哲二 著 A5判 280頁 本体2,400円

1970年、8千米峰の中で最難といわれたダウラギリ第2登に成功した著者が、61歳で憧れのエベレストに挑む。

御嶽の風に吹かれて—開田高原への招待—

久山喜久雄 著 四六判 180頁 本体1,900円

木曾御嶽の東麓、雄大な自然と文化の脈打つ開田高原に暮らす人々の姿と四季の移ろいを綴る。

カラコルム・ヒンズークシュ登山地図

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入 385ページ B全判地図13葉

宮森常雄・雁部貞夫 共著

◎好評発売中!! 定価(本体33,000円+税)

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL http://www.nakanishiya.co.jp/

今夏、日本と中国の女性だけの合同登山隊が世界第6位の高峰であるチョー・オユー(8201m)南西壁からの全員登頂を目指します。この登山は日中国交正常化30周年ならびに国際山岳年を記念し、中国チベット登山協会からの働きかけを受けて実現したものです。

日本山岳会の女性の合同登山は1980年の「カメット登山隊」以来であり、中国とは初めての試みです。

チョー・オユー峰は現在では多くの日本人にも登られています。情報が乏しかった中国の女性登山者との8000mへの挑戦は大変貴重な体験となると思います。

■隊の名称

日中友好チョー・オユー女子合同登山隊2002

2002年夏 チョー・オユーへ 初の日中女子合同登山隊

■行動予定

8月6日 日本側隊員成田出発
8月26日 チョー・オユーBC入り
9月20日 登頂予定
10月20日 帰国予定



撮影 九里徳泰

■日本側隊員

隊長 橋本しをり
登攀隊長 恩田真砂美
隊員 井出里香
隊員 柏 澄子
隊員 大窪三恵
隊員 足立道代

●募金のお願

会員有志の募金をお願いします。
【受付期間】 8月31日まで
【金額】 一口5千円
お振り込み先

①東京三菱銀行 笹塚支店(普通)
1270701 「日中女子チョー・オユー登山隊」
②郵便振替口座 00110・8126498 「日中女子チョー・オユー登山隊」

●支援トレッキング

また、今回の登山を記念して支援トレッキングが催されます。中国・成都経由でチベット・ラサ入り、チョー・オユーBCを訪問して隊員を激励します。さらにチョモランマBCも訪れ、帰路はネパール・カトマンスに抜けるというとても贅沢なコースです。チベットのトレッキングをお考えの方は、この機会をご利用ください。

●期間 9月17日(火)〜29日(日)

●お申し込み、お問い合わせは左記までお願いします。

(株)ウエック・トレック 貫田宗男
TEL 03・3437・8848
FAX 03・3437・8849
Eメール info@everest.co.jp

●さんけん通信●

上高地サッカーチーム

管理人 木村太郎・弥生

山研の管理人というのは、うかうかしていると運動不足になりがちです。山研内での一番の運動と

いうと、地下で風呂掃除をしている時に、鳴り響く電話めがけて急な階段を一気に1階まで駆け上がる時くらいなもの(めったにありませんが)。

そこで昨シーズンから始めたのが「サッカー」。上高地で働く他施設の従業員の方と一緒に男女混成のサッカーチームを作り、週に1、2回みんなで楽しんでいます。しかし残念ながら人数が揃っても全員で5名程度。イレブンには程

遠い3人对3人といったこちんまりとしたチーム編成で、いつも午後5時半に上高地の駐車場でキックオフです。

日中は観光バスで溢れている駐車場も、午後5時半を過ぎるとガランとしています。そのスペースを利用させてもらっての標高1500mでのサッカーです。ワールドカップに出場したチームも真っ青の、高所トレーニングになっています。

報告

REPORT
7月

図書委員会

山岳史懇談会 山口耀久氏の話



ワルツみたいな文章を書きたい、と山口耀久氏

待ち望まれていた『北八ッ彷徨』が「定本」として復刊され、続編ともいえるべき『八ヶ岳挽歌』も刊行になった。その著者・山口耀久さんを迎えての集まりが4月11日本会集會室で行われた。事務局には問合せが多かったというので机

を取り払い、部屋中に椅子を並べて用意したが、それが満席。本の人気と著者の肉声に接したいという人の多いことを物語っていた。

山岳史懇談会ということだったが、司会の宮下啓三理事(前慶應義塾大学独文科教授)の文学論的導入から、話はまず文章論のようになかたちで始まった。山の文学なんて言葉は使いたくないから山の文章ということにしてくださいと言い、山の文章の基には山での感動がなければダメ、感動のないところからはどんな文章も生まれないと、再三くりかえす。

自然は何もしゃべってくれないが、そこから受けた感動は書き表したい、しかし感動すればするほど言葉は遠ざかってゆく。80パーセント表現できたならばと、自著の一部を引用しながら山の文章のむ

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

ずかしさを説明。話の中に6番のトリコニーという、戦前から山に登っていた人らしい言葉が登場。冬の八ヶ岳縦走で、これでアイゼンなしで歩けたという。さらに、大事なものは説明ではなく描写すること、そこに心や感性が語られるのだから。「アンナプルナ」や「星と嵐」を読んだときのような感激は最近のものからはなくなった、写真や絵は盛んだが、文章表現の伝統は山では消えてしまったのでしようかね。

影響を受けたのはもちろん尾崎喜八さんだが、ほかに大島亮吉、田部重治、石川欣一など、さらに浦松佐美太郎、松方三郎が好きで、浦松さんのは山の文章のお手本です。そして、夏の山なら汗の匂いが、冬の山のことなら、寒さ、冷たさが表現されていなくてはと語り、自分はそういうつもりで書いている、と。

北八ッへ行くのは秋が多かった。夏、穂高や不帰で激しい山をやっていたから、息抜きのように行っていたのだが、相性がよくて、書きたい気が自然に起きてきた。『北八ッ彷徨』は通過点のつもりだったのが二冊出すのにこんなに

てしまった、まだ直したいところがあるから「定本」は困ると言ったのだが、販売の都合ということでもうなった。『彷徨』は短調だけ長調の明るい、ワルツみたいな文章を書きたい、八ヶ岳以外のこと、岩登りのことなどをまとめて出したい、もう残り時間がないから、来年の喜寿までにはと、期待を持たせてくれた。

戦時中、所属山岳会が活動できなくなり、それならと自分たちでつくったのが獨標登高会の前身。山から帰ったら家が空襲で焼けていたという会員もいた。どうせ兵隊にとられて死ぬんだからと、虚無的、絶望的に山へ行つたとよくいわれるけれど、そんなウソです。よ、山へ行けばすこい解放感を味わえた。

戦争が終わった時は二等兵で山陰にいて、大山を眺めていたけれど登る時間がなかった、雪の大山に登りに行くつもりだったが、今年が雪が早くに消えてダメだった。むかしの山の会は文学青年の集まりみたいで、映画や芝居など山登りの周辺に文学的な雰囲気があったが、いまはそうではないみたい。昭和30年代の獨標登高会はずこい

メンバーがいつばいいて、日本でも五指に入る実力を持つていたと思うけれど、岩登りがうまいのは文章がダメという傾向がありパランスがとれないので『八ヶ岳研究』では文学的な面はすべてとってしまった。

年齢を感じさせない張りのある声といつも変わらないザックパランな話し方で、歳をとったほうが山登りは楽しい、山のよさが若いときよりもよくわかると、密度の濃い話が続いた。(大森久雄)

集会委員会

世界遺産の島 屋久島・宮之浦岳登山

1993年、その特異な植生から世界遺産に登録された屋久島。この島には九州最高峰の宮之浦岳(1935m)を始め、2000m近い山やまがひしめいている。目指す宮之浦岳は島の中央部で奥深い。初日はホテル泊で英気を養い2日目から本格的登山となった。この日、月に35日も雨が降るといわれるこの島が、地元の人も驚くほどの見事な快晴となった。

登山口は荒川口。大正時代に敷



眺望360度の宮之浦岳山頂(1935m)

設された木材搬出用のトロツコ軌道歩きからである。道は巨岩怪石がごろがる安房川の深い渓谷を上流に向かっていて。二代杉を過ぎ軌道が終わる大株歩道入口からはいよいよ本格的な急坂の登山道となった。コケに覆われた巨大な石や屋久杉に、ガジュマロや名も知れぬヤドリギが巻き付いている。

この原始の森に分け入ること約3時間。そろそろ歩き疲れた頃、巨大な切り株「ウイルソン株」に出会った。秀吉が京都の方向寺の建立のために切ったと言われ、その無残な姿に心が痛む。さらに「大王杉」を過ぎ、目指す「縄文杉」に到着したのがちょうど昼頃。

この樹齢推定7200年、根回り43cmの巨樹が目飛び込んできた時、誰もが「ウォー」と声を上げていた。ウイルソン株と違い、現に生きているのだ。赤銅色の木肌が力強くうねり、見る者すべてを圧倒する。ここで休憩の後出発。ほどなく今日の宿泊地「新高塚小屋」に着いた。ここでヤクシカと戯れながら夕食、早めの就寝となった。

3日目も快晴である。歩き出してすぐに尾根筋となり、眺望も開けてきた。第一、第二展望台を過ぎ焼野三叉路で空身になり、まず永田岳に登った。巨石累々の頂上からは優美な宮之浦岳、眼下には永田港が光って見える。しばし眺望を楽しんだ後、百名山の宮之浦岳に向かった。頂上からの眺めは360度。遠く種子島もかすかに見える。

ここで大休憩の後、下山口の淀川口方面に向かう。稜線沿いの軽いアップダウンを栗生岳、翁岳、安房岳と過ぎ、しばらく歩くと花崗岩と白砂に覆われた「投石平」という日本庭園のような美しい空間に出た。谷間にはヤクシカナゲの群落が広がり、緑に覆われた

周囲の山やまには、白い花崗岩がオブジェのように顔を出している。見事というほかない自然の造形だ。この寶石のような景観に後髪を引かれながら一路下山。花乃江河の湿原を通り、淀川小屋、そして終点の淀川口に到着した。

登山路の所どころで満開のシャクナゲに出会い、めったにない好天にも恵まれた。遠い九州の沖合、屋久島の思い出深い4日間の山旅であった。(西田和夫、向田吉彦)

92同期会

第16回山行「山研」集合

残雪と新緑の交錯する季節に上高地を訪れたいという意見が早くから出され、5月25日(土)、26日(日)の両日、「山研」に現地集合、現地解散というかたちで、この企画が実現しました。

山を愛するという共通の土壌で結ばれるとともに、写真、絵画、俳句、短歌、音楽、七宝焼きなど、各分野で優れた業績を残している人たちが、それぞれの立場から話題を提供し、会話を楽しみながら夕食を囲むのが私たちの会の習わしです。今回は自由時間に各自題

材を求めて山深く入り、然るべきものをしつかりつかみ、夕刻総勢12名が顔をそろえました。

山行直前の5月16日、会員の渡邊玉枝さんが念願のエヴェレスト登頂に成功したという報に接し、出席者全員で快拳に乾杯をしました。また、村中征也さんは手製のアルプホルンを抱えて参加し、山研談話室で優雅な音色を披露し、参加者を魅了しました。

本年は92同期会結成10周年の記念すべき年にあたります。4月の日本山岳会「高尾の森」での植樹祭参加を皮切りに、今年もさまざまなイベントを企画しようと、夜の懇親会は大いに盛り上がりを見せました。(沼田 俊雄)

三水会

韓国シリーズ第5回 金猿山・伽椰山・冠岳山

今年の山行は、溪谷と花と歴史を訪ねることを目的とした。

5月12日(日)12時過ぎ、成田から仁川空港へ。三水会員13名、韓国人2名計15名でチャーターバスに乗車。京釜高速を走って慶尚南道の居昌行き、新築のモータールに



溪谷沿いの山道を登り、金猿山頂上に到着

宿泊。夕食は韓定食をとった。

13日(月)早朝起床。6時40分バスで出発し、金猿山自然休養林のチジェミゴルのユアンチョン溪谷をたどって、山頂へ登るコースを目指す。45分ほどかかって上川里の登山口に到着する。入山料金所は無人であった。沢沿いの林道を行き、公園管理事務所に沿って右折少し歩いて左岸の山道に入る。

きれいなナメ床のチャウン瀑布が現われ、対岸にオオヤマレンゲの白い花が咲いていた。この先にバンガローがあり、まもなくユアンチョン第2瀑布が30メートルの斜滝と30メートルのナメを見て流れている。いい眺めだ。この上にユアンチョン第1瀑布が25メートルの落差で水音を

大きく響かせている。しばらく行くと溪谷が消え、林道を横切って山道に入ると尾根の急坂となり、チンダルレも咲いている。11時過ぎにケルンの積み上げられた金猿山頂上(1353メートル)に出た。

360度の展望で、北に徳裕山、南西に智異山が見える。昼食後、箕白山の方向に縦走し、ふたつ目の鞍部で右の分岐を下降し、サピヨンに下山した。日本的な良い道と岩石の悪路が交互に出てきた。

この山の花は石井由紀会員の調べではチョウセンヤマザクラ、コケイラン、コケリンドウほか14種。サピヨンの民泊には元在日の方

がいた。竜湫寺に寄らず、バスで居昌に戻る。夕食はカルビ。金猿山登山については、茂木完治会員に大変お世話になった。

14日(火)早朝起床。韓国三大寺刹の海印寺へバスで行く。伽椰山入山口に7時30分に到着。当初は伽椰山登頂を考えていたが、ソウルの交通事情から途中の待避所で右折し、磨崖仏を見て海印寺に下山し、八万大蔵経(韓国の文化遺産のトップ)を見学した。

昼食後バスに乗り、金泉で高速道に入り、ソウルの乙支路のホテルに18時ごろに着いた。夕食は参鶏湯にした。

15日(水)、予定が近郊の冠岳山なのでゆつくり起床。故障者が出て、行動できる数人で地下鉄の舎堂まで行き、住宅街の裏から山道に入る。

標高が3000〜5000メートル台なので楽な山行と思っていたが、岩場もありけっこうきつい登りが続く。広い台地に出ると、ソウルの市街地や北漢山まで見えた。マダンバウイ(急峻な岩場)を登ると、救急の目印看板K2があった。頂上の無線塔はまだ遠い。行けども行けども、という感じがする。

頂上は絶壁の上であり、設置されたザイルにつかまって左斜めにトラバースすると、頂上のヨンジュユ台に出た。無線塔は軍用で、頂上の一角には仏殿がある。下降してヨンジュユ庵の手前に来ると、オオヤマレンゲが咲いていた。立派になった寺で昼食にあずかり、果川に下山した。

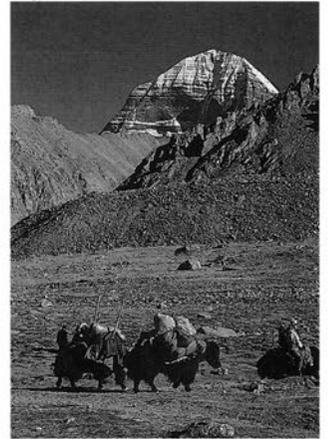
夜は恒例の打上げを竜水山で行い、ガイドを務めた方に感謝を申し上げた。

16日(木)、大韓航空の午後便で帰国した。(石田 稔郎)

海外の山

フジヤマと
カイラスめぐり

江本 嘉伸



カイラスをチベット人のように歩く(田中明美提供)

「富士山に面白いことが起きている。外国人でいっぱいなんですよ」

何人かの友人がそんな報告をした。7月1日の「山開き」以前のことで。

W杯サッカーの熱狂のさなか、各国からやって来たサポーターたちは六本木で氣勢を上げていただけではなかった。試合の合間を見て「フジヤマ」に繰り出したのだ。中には、上半身はだけ、という超軽装の「不屈き者」もいたようだが、登頂率は高かった、と聞く。途中の小屋はまだ開いていないが、そんなことは意に介さず、ぐんぐん登る。

「雪が一部に残っているのにスニーカー・スタイルもいて、それが案外強いんだ。その分、完全装備の日本人中高年登山者たちののろのろスピードが目立ったね」

ドイツ人はじめ欧米からの客が多かった。6月は、まだ山開きの前だが、かつて「富士山の登山期間は6、

7月」と英語のガイドブックで紹介されたことも影響しているのだろう。日本に来たついでに、富士山に登つてみようと考えた外国人は、想像するより多い。昔から日本の代名詞のようになっているその名、かたちの美しき、抜きん出た高さ、それに「シントウ(神道)への関心などが、動機だ。

昨年9月、国土交通省富士砂防工事事務所が企画した「御中道」めぐりに参加したことがあるが、中に、カナダ在住のアメリカ人がいた。大変日本最良の人で、日本に来るたびに、修験道の現場を歩いているという。途中、山荘で一泊し、「御胎内」と呼ばれる洞穴の前まで来たとき、彼はザックから山伏の衣装を取りだし、その格好で、右手を伸ばしてビデオカメラを構え、英語でこの洞穴の意味を語り出した。帰国して、友人たちに見せるためなのだろう。そ

れにしても、富士山についての知識には驚いた。外国人の中には日本の山好きもかなわない博識と情熱を持った人がいる。

W杯サポーターたちが富士山に登る1ヶ月ほど前、チベットの聖山、カイラスを一周する巡礼路を黙々と歩く日本人女性がいた。首都ラサカから西へ1300^キ。有名なマナサロワ湖の北岸に位置するこの山は、仏教徒であるチベット人だけでなく、ヒンドゥー教徒にとっても日本人にとつての富士山以上に大事な聖山である。標高6656^キ、別称はカン・リンポチェ、チベット人はカン・テイセとも呼ぶ山の周囲は52^キ、巡礼たちはこれを「コルラ(ぐるり一周)する。

外国からの旅行者も、しばしばこれに挑戦する。といつても、最も低い出発地点のダルチェン(大金)ですら標高4585^キと富士山の1.5倍の高さだ。チベット人が一日でやりとげるコルラを通常3日ばかりで一周する。途中、ドルマ・ラという5668^キの峠があり、ほとんど高所登山の領域なのである。

92年以来5度目になるカイラスめぐりを、しかし、ふだんは着物姿を通すこの小柄な女性はチベット人と同じようにやりたい、と考えた。5月はじめにダルチェンに到着、最初

の一周は、1泊2日で歩いたが、そのためにかつぐ荷物の重さを考えたから、チベット人並みのほうがいい、と思ったという。

5月16日に見事52^キの一周を1日でやりとげた時の喜び。「みんなに言いたくて、言いたくて」ラサカからチャンタン高原4177^キを5ヶ月がかりで馬で旅したこのある日本人巡礼はあととまで嬉しそうだった。が、ほんとうの自慢は、これ1回に終わらなかつたことだ。

高所での長距離歩きの疲れをもつともせず、女性は3日おきに「挑戦」を続け、何と4回も52^キの「コルラ」をやつてのけたのである。

チベット人たちの間では、カン・テイセ・コルラを12回または13回(両説がある)やりとげた者は、ダルチェンから1時間ほど急登したところにあるカン・リンポチェ内院(ギャンタ・ゴンパ)に行くことが許される、という。そういえば、富士山の御中道めぐりも頂上に3度登った者の「特権」だったと聞く。

日本人として初めて河口慧海がカイラスに参拝してから102年、身体を張つての旅のスタイルが夫の椎名誠以上に評判のこの女性、イチラ(チベット語で渡辺「枝」いちえい(愛称)は、どうやらその内院入りを目指しているようである。

Climbing & Medicine · 11

登山とVAAM

阿部 岳

VAAMはVespa Amino Acid Mixtureの頭文字をとったもので、Vespaとはスズメバチ属の学名である。山裾の大きなクヌギに群がっている、あの巨大で凶暴ですばしこい、疲れを知らない働きぶりの蜂の生命保持に不可欠な、何と幼虫からもらう栄養液の主成分である。これは17種類のアミノ酸の特異なバランスで構成され、特にプロリン、グリシン、スレオニンの含量が多く、ミルクやたまご、肉などとは全く異なったアミノ酸組成を示している。

マウスにVAAMを飲ませると、水やブドウ糖やミルク・ガゼインと同じアミノ酸組成物を飲ませた場合に比べて、遊泳時間が有意に長くなる。これは運動に伴って増加する疲労物質の乳酸生成が抑制され、疲れにくい上に血中のブドウ糖の減りも少ない。運動時の血糖の維持は脳の機能保存に不可欠である。

これらのことから乳酸を生成しない高カロリーの脂肪がエネルギー源となっていることが、血中脂肪酸の増加で判明した。これを上手に使うとダイエットにも有効である。さら

に、ヒトでは実験動物と同様の脂肪燃焼作用だけでなく、呼吸症の低下、血中アミノ酸の運動に伴うアンバランスを抑え、恒常性を保ち、さらに運動負荷に伴う心拍数の上昇抑制やコルチゾールを抑制し、運動ストレスの緩和が見られた。

このほかにも、最近の研究から肝機能や腎機能そしてエネルギー代謝効率の向上を示唆するなどさまざまな結果が出て、VAAMの多機能性が明らかになってきた。一方、商品として市販されているVAAMの反復使用で、シドニー・オリンピックの女子マラソンで金メダルを獲得した高橋尚子選手など、トップ・アスリートのパフォーマンスの向上、健康人の体脂肪率の低下、血中コレステロール、中性脂肪など種々の脂質因子の低下が報告されている。

登山は全体を見れば多くの場合、持久運動であり、有酸素呼吸運動であるから、VAAMの脂肪燃焼作用がエネルギー生産の助けになり、登山時の心身の疲労回復に役立つものと思われる。実際、たくさんの方が山登りにVAAMを使い、技量の上下に関係なく、全ての登山者がVAAMの持つ多機能性から顕在的か潜在的の違いがあっても、さまざまな作用を感じている。とくに、空腹を感じる登山はVAAMの摂取には良い条件で、効果も出やすいと思われる。登山はまた寒冷と高所に対する適応が要求されるが、これらの適応とVAAMの作用については今後の研究を待たなければならない。また、山に限らず、海における遭難など飢餓の伴う極限状態の危機にも、VAAMの有効性がかなり期待できる。

注：阿部岳氏（理化学研究所・専任研究員）は非会員ですが、本年1月29日の医療委員会で、VAAMの発明者として「スズメバチ栄養液に見られるアミノ酸混合物（VAAM）の機能性」の講演をしていただきました。本稿はその要約です。

（医療委員会 大野秀樹記）



JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

秋田支部

巨木と奇木の小比内山

昨年好評を得た残雪の山。本年度も初山行として残雪を楽しむ山を企画、4月14日、12名の参加者で実施した。

今年は例年になく春の足取りが早く、山の雪解けも予想以上だ。当初計画の大台山を変更し、残雪のある小比内山(1004^米)で春の一日をと、雄勝町三ツ村の林道に車で入る。

東沢と西沢の分岐から登山開始である。東沢に沿って伸びている林道を行き、途中スギの造林された急斜面に取り付く。溶けかかった残雪が固くなって残っているが

消えている場所もある。

尾根に出たあたりからは、造林から自然林に変わる。道のない山は残雪のある今の時期が一番歩きやすい。マンサクの花と、遠くで奏でるウグイスの恋歌が心の疲れを癒してくれる。

枝の先が手のひらのようになってた珍木のブナが点在して現れ、ナラ、ヒバ、ネズコの巨木の奇木も我われを原始に導き、足取りを遅くさせる。巨木の奇木がこんなに残っている山も珍しい。

今日のように、晴れて気温が上がり、と固雪も腐り、わりと楽に登れる。雪庇もほとんど落ちていて



残雪と巨木と奇木と展望を楽しんだ

心配することもない。急斜面はピッケル一本で安心だが、この山はアイゼンとピッケルなしでも登ることが出来る。

山頂近くまで来ると尾根が広くなり、太いブナが樹立している。ブナの根回りは若干雪解けしているものの、あたり一面まだ銀世界だ。

山頂の三角点もまだ雪の下であったが、木々の間からは虎毛山など県南の山々が展望でき、春山の一日を楽しんだ。下山後、まだ日も高いのでふたつ目の山として稲川町の雌長子内岳に登った。

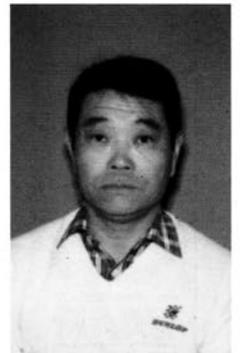
(柳田 勇悦)

信濃支部

支部長に中野和郎氏を選任

平成14年度信濃支部総会は4月21日(日)に松本市内の第一会館で開催された。本年度は支部役員改選期にあたり、支部長等の交替が行われて、新しく信濃支部長に中野和郎氏を選任した。

中野氏は日本山岳会信濃支部に1959年に入会し、以降、信濃支部の合宿や技術講習会ではリーダー格で活動してきている。その



登攀力も抜群、新支部長

抜群の登攀力は天性のものとも思われるが、加えて優れた判断力、リーダーシップは若い頃からの数かずの冬山経験に負うところが大きい。会員が華美より素朴を、都会より田舎を志向する信濃支部においては、中野氏は最もふさわしいリーダーといえるであろう。

また、副支部長に百瀬寿雄氏を選任し、さらに総務委員には中島忠、安藤幸明、会計委員に財津達弥、ウエストン祭委員に中村行徳、女性担当委員に宮原岳子、石塚克美、山研担当委員に鳥居総一郎の各氏を新任した。留任役員とともに信濃支部の運営を担うこととなった。

新規事業として、山行計画では信濃支部の得意分野でもあった雪山山行を復活させることとし、会員の高齢化にも考慮して山域を選択していく。また、支部会員相互のコミュニケーションを一層充実させるため、支部報やニューズレ

ターに合わせて、支部ホームペー
ジの開設準備をすることとなった。
総会出席者は、最近の不況も影
響しているのだろうか、35名と例
年に比較して若干少なかったが、
総会終了後引き続き懇親会に入り、
最長老の東演義男会員が乾杯を先
称し、和気あいあいの一刻を過ご
す。
(山浦源太郎)

岐阜支部

春季懇親山行 新緑が目にしみる築谷山

築谷山は、飛騨と美濃の境にあ
り、金山町、明宝村、和良村の境
界にもなる奥深い山である。交通
不便な和良村に参集し、支部総会、
懇親会を4月27日に無事終了した。
翌28日、車で一時間ほど馬瀬川
そして弓掛川に沿って北上し、築
谷林道終点で下車。広葉樹林の中
に設けられた、谷沿いのしつかり
した道を登る。すぐに道は分岐し
ており「南尾根ルート」に取りつ
く。あたり一面広葉樹林の新芽で
明るく感じる。林の一角にクマガ
イソウの群生地があり、可憐な花
を咲かせている。
斜面をトラバースし尾根を越え

ると、涙雫ほどの水量の「小鹿の
涙」滝に着く。立て札の横には、
蕾をつけたヤマシヤクヤクが佇ん
でいる。しばしの休息で息を整え
出発。斜面をトラバースし、鮮や
かな緑の回廊のような尾根を歩く。
道はよく整備され、しつとりと水
分を含んで足の感触が快い。

南尾根展望台からは、さらにな
だらかな尾根を歩く。ほどなく岳
美岩を過ぎ山頂に到着。山頂から
の展望はすばらしい。恒例の万歳
と乾杯で昼食。そして、新芽のて
んぶら。

昼食中に、支部顧問の松井先生
が登頂してきた。帰りは「ブナの



新緑の築谷山に登った52名

木ルート」を下った。ヤマシヤク
ヤクの群生地、白い清楚な花を
堪能する。参加者52名。
(今峰正利)

山梨支部

40回目の木暮碑前祭

「奥秩父の父」木暮理太郎の業績
と人となりをも偲ぶ碑前祭を5月25、
26日の両日、山梨県須玉町の瑞牆
山麓で開いた。木暮翁を偲ぶと
もに、記念登山と交流会などで懇
親を深めた。

碑前祭は26日朝、山梨支部の坂
本桂委員長の司会でスタート。碑
に献酒、献花の後、古屋学而支部
長があいさつし、40年の歴史を振
り返った。続いて山崎郁郎会員と
宮下啓三本部長がスピーチをす
る。山崎会員は父親・金次郎さん
と木暮理太郎や霧の旅会の会員と
の交流などを話した。

宮下本部長は、槍ヶ岳の初登
頂は小島烏水だが、その数年前に
木暮理太郎が初登頂を計画し、地
元の人たちに装備の貧弱さを指摘
されて断念したエピソードを紹介
し、木暮理太郎が初登頂していれ
ば、その後の奥秩父との関わりを



木暮翁を偲ぶ碑前祭も40回目を迎えた

含めて、日本の登山史は変わって
いたのではないかなどと、歴史の
面白さを披露した。

この後、昨年行われた全国植樹
祭会場の跡地に移動して、瑞牆山
の中腹にある「カンマンボロン」
の見学に出発した。カンマンボロ
ンは岩壁に穿たれた窪みが梵字の
大日如来と読めると言われること
から、謎の窪みとされている。参
加者約20人は、見上げる「梵字」
に感心しながら記念写真におさま
った。

碑前祭に先立って25日は午後1
時に金山平に約50人が集合。山梨

支部の堀口丈夫会員らが準備したイワナの骨酒と塩焼き、山菜料理で酒を酌み交わした。また長年、中心となって碑前祭を運営してきた山村正光会員が、車椅子ながら元気な姿であいさつをし、拍手を浴びた。

木暮理太郎の顕彰は、霧の旅会などが1951年に金山平の大岩にレリーフを設置したのが始まりである。59年の台風による出水で周囲が削られ、大岩が不安定になったため、60年に霧の旅会、石楠花山岳会、日本山岳会山梨支部、山梨県山岳連盟などが協力してレリーフを埋め込んだ碑を現在地に移して建立した。5月に碑前祭、10月に木暮祭が開かれている。

(深沢 健三)

*山梨支部からお願い

木暮理太郎のレリーフ・碑の設置経過や移設の背景などの資料を集めています。お心あたりのある方は深沢までご連絡ください。

〒405-0011 山梨市三ヶ所735-2 電話・ファックス 0553-22-3828 Eメール ken-3@sannichi-ybs.co.jp)

図書受入報告 (2002年5月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
金邦夫	奥多摩登山考	256pp/22cm	東京都公園協会	2002	都岳連寄贈
野津治仁(編)	ネパール(ネパール語)[旅の指さし会話帳 No. 25]	128pp/21cm	情報センター出版局	2002	出版社寄贈
大内尚樹(編)	日本の秘境:人跡未踏?の秘境を訪ねる[別冊太陽]	132pp/29cm	平凡社	2002	出版社寄贈
山口耀久	八ヶ岳挽歌	386pp/20cm	平凡社	2001	著者寄贈
大関保	続・ネパールヒマラヤの山旅[山岳叢書 No. 5]	262pp/20cm	穂高書店	2002	著者寄贈
日本登山医学研究会(編)	日本登山医学シンポジウム(第22回)2002年5月18~19日	48pp/30cm	日本登山医学研究会	2002	発行者寄贈
日本山岳会福岡支部(編)	九州の岳人たち:その登山史	549pp/22cm	日本山岳会福岡支部	2002	発行者寄贈
日本山岳会岐阜支部(編)	自然・登山・探検[復刻版]:岐阜支部創立30周年記念出版	214pp/19cm	日本山岳会岐阜支部	2002	発行者寄贈
日本山岳会岐阜支部(編)	自然・登山・探検[続編]:岐阜支部創立30周年記念出版	222pp/19cm	日本山岳会岐阜支部	2002	発行者寄贈
日本山岳会東九州支部(編)	大分百山[改訂版]	227pp/18cm	日本山岳会東九州支部	2002	発行者寄贈
志水哲也	黒部(写真集)	104pp/31cm	山と溪谷社	2002	出版社寄贈
足立朗(編)	画家足立源一郎の記録(1889~1973)	909pp/27cm	美術の図書三好企画	2002	編者寄贈
芳野満彦	新・山靴の音[第3巻]	214pp/19cm	東京新聞出版局	2001	著者寄贈

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度でお願いします)



イラスト・宇都木慎一

日本山岳会会員として 4世代続く家系

早乙女 緩次

日本山岳会の長い歴史が、間もなく100周年という記念すべき節目の年を迎えようとしている。この機に及んで表記のごとき類例はまずほかにはあるまいと思うのである。

イギリス人の宣教師ウオルター・ウェストンが、最後に日本を訪れた時に夫人も同伴であったことは、多くの人たちの知るところである。その折り有明山に登ったのが1912年(明治から大正に変わる年)の8月13日である。

翌日の14日は信州におけるお盆の最中であつた。ルートも今日と

は違った濁小屋方面からで、ウェストン夫妻らは中房温泉の主で、明治40年(1907)既に会員番号108の百瀬亥三松も一緒に燕岳に登っている。ウオルター・ウェストンは、当時大変世話になつた思い出の、好印象を日記にも書き残している。

この百瀬亥三松なる人物は、やがて南安曇郡下から長野県議会の議員にも選出された人であつた。

この百瀬亥三松は、『山岳』第4年第2号の雑文の中に「日本アルプス探検家諸君に」と題して、登山者の無謀な計画に対する警告を唱えてもいる。その子息で大正12年(1923)に北アルプスの縦走路の稜線上の西岳近くに小屋を建設した百瀬彦一郎は、昭和4年入会の会員番号は1085であつた

(『山岳』第23年第3号)。

さて、次は敗戦後にシベリアでの抑留生活からようやく釈放されて、信濃支部発足時の昭和22(1947)年6月22日に日本山岳会に入会した時の番号が2735の百瀬孝(古信濃支部会員)さんである。

この百瀬孝さんこそは、早稲田大学山岳部の現役時代に、当時としてごくはやりの極地法登山実行の推進者であつて、自らも昭和16年(1941)の春、西穂高岳から奥穂高岳への縦走のリーダーを務めている。敗戦後の一時期は、信濃支部だけでなく全国津々浦々に渡つて、戦争で人材の失われた山岳界にあつて即応登山技術の普及のために、家業の温泉旅館やら、殺生小屋やら、西岳小屋の経営もそつちのけで、連日にわたる活躍をしてくれた貴重な存在でもあつた。

この百瀬孝さんの献身的に活躍された当時を称えるため、昔お世話になり指導を受けた、古い信濃支部員と早稲田大学山岳部OBらが、松本駅前のホテルに集まって、「百瀬孝さんを囲む会」を合同で開催した機会に出席し、盛大に催さ

れたことを思い出して感謝したひとりである。平成11年(1999)7月3日のことであつた。

その時、既に百瀬孝さんの子息の信敬君が、日本山岳会に12587番として入会していたのである。ここに私の高校同窓の先輩にあたる、この百瀬孝さん一族のいやさかを祈念して、日本山岳会や、信濃支部における良き宝話として後世に伝えられることをと思つたのである。この百瀬さんの家系こそは、日本山岳会史の宝として、特例の記事としても残される無形財産なのであろう。

自分の想いを、「本」にしませんか。

——山岳書をつくるプロが、発刊のお手伝いをします——

山行記録集のほか、紀行・随筆・歌集・句集・詩集・写真集・記念誌などを、お望みの形や様式でつくることができます。まずは、お気軽にご相談ください。

■詳しい資料をお送ります。お問い合わせ・お申し込みは——

TAKEUCHI 制作室
GRAPHICARTS & EDITORIAL

Tel.075-604-3120 Fax.075-604-3123
E-mail takeuchi@fd3.co.jp

〒612-8427 京都市伏見区竹田岡橋木町55番地 FD.サンワ

俳句

木暮翁碑前祭

川崎 精雄

嶺仰ぐ岳人の碑や遠郭公
岳人の丘一斉の榊芽生え
鮎岩魚鱒山女焼く庭焚火
微雨の中時鳥啼き木暮祭
春月に骨酒を酌み木暮祭

俳句

ウエストン祭

小林 碧郎

駒鳥や夙に発ちつく幕营地
筒鳥に登路覚めゆく二輪草
をだまきや朝日皓き梓川
ウエストン祭峠越え来し子らの歌
ウエストン祭また幾とせの梅匂ふ

詩

ヒマラヤの少女

上野 幸人

笑顔がステキな少女

第4回「森の勉強会」

南川 陸夫

5月11、12日、京都府美山町中の自然文化村(河鹿荘)および、京都大学芦生演習林において、京都、関西、岐阜、東海4支部共催の表題の会が開催された。参加者は、本部の篠崎仁自然保護委員長を始め、総勢24名であった。

■3講師のお話

11日の座学は「森林という生態系」海老沢秀夫、「森林と生きものに對する人間の倫理的責任」飯高恒夫、「茅葺民家の話」高松武夫の三講師からそれぞれ含蓄のあるレクチャーをいただいた。

海老沢さんのお話は、吉良竜夫著『森林の環境・森林と環境』地球環境問題へのアプローチ(新思索社)を底本とする、画像と図表を多用した洗練されたレジュメにそってレクチャーが進み、理解が深まると同時に、森を見る科学的なポイントが示された。印象に残ったのは、①森は森(木水土)と書くのがふさわしい(中国の生態学者の説)。②一本の木の重さの半分が炭素量である。③数世紀

にわたって人間のエゴで破壊した森林と自然をどう回復させるかが人間が今問われている大きな課題である、ということだった。

その後篠崎さんより挨拶とスピーチがあった。スピーチの内容は、一、自然保護は今日、日本山岳会の活動の重要な柱となった。会を挙げて取り組んでいきたい。二、当面次のテーマをすすめる。①日本山岳会の森づくり(東京都・景信山)に力を入れていく。生態系に配慮した植林計画をすすめる。

この森づくりは社会的にも認知され始めた。②山のトイレ問題の提言をまとめ、環境庁や関係先に働きかける。③大台ヶ原などのオーパユース、登山道の荒廃についても提言していく。三、「森の勉強会」は内容がすばらしく、4回も続けてきた関係支部の知的活力は高く評価する。今後も続けてほしい。そのため本部委員会でも必要なら援助を惜しまない。ほかの支部、地方にもこのような催しを行うよう、本部委員会から働きかけていきたい。

午後からの飯高さんのお話では、人間の理想的な森への関わり方が提示された。

「山岳」氏名不詳氏判明

「山岳」第96年(2001年12月刊)の「第2次RCCのあしあと」45ページ上段にある写真「洞沢講習会」の後列左端の氏名不詳者について、鮎川湜(ふかし)会員(11004番)から5月下旬、山岳会あてに「それは私です」とEメールがあった。

鮎川会員は、関西大学山岳部出身で第2次RCC会員ではないが、同人の藤木高嶺(写真前列左端)、片山全平(後列右端)両氏の後輩で山岳部の現役時代に藤木氏の写真機材運搬などで山を一緒にしたこともあり、講習会にもお供したという。(関塚 貞亨)

高松さんのお話のあと、車に昇り、茅葺民家が最もたくさん建つ北の集落を見学した。そこでは、偶然にも葺替え作業中の家屋があつて、屋根材の積層構造や、それを止めてゆく職人技を見る事ができた。ここでは声で葺いており、これが屋根材としては最も良いと職人は言っていた。美山町の民家は「京都北山型民家」と呼ばれる独特の造りだそうである。もともと、茅葺屋根の残存率が日本一高いこの地域だが、茅葺を

まなざしは私をひきつける
あふれでるいとおしさに
私の胸がしめつけられる

我が子のように

辛くはないだろうか
幸せなのだろうか
手をさしのべて
そばにおいてあげたい

笑顔がステキな少女

なぜこんなに
心が豊かなのだろうか
あふれでる愛らしさは
私の心を打つ

この子は
辛いのではない
幸せなのだ
手をさしのべているのは少女
ヒマラヤの少女だった

復活すれば、その費用の半分は町
が負担するということで、復活の
傾向は強まるようだ。

■ 芦生の森で実習

翌12日、心配された雨も上がり、
さわやかな好天となった。新緑が
鮮やかな河鹿荘をあとに、森の入
り口、須後へ。ここで2班に分か
れて実習に入る。1班は佐々里峠
から尾根伝いに赤崎中尾根の頭に
至り、ここから道のない中尾根を
ルートファインディングしながら
下り、16本の幻の古代杉を見学し
た。私が入った班は13名で、チャ
ーターしたバスで出発点となる長
治谷作業所跡へ移動する。ここに
建っていた作業所の母屋は、大正
時代の風格ある木造建築だったが
2年前の冬の積雪で倒壊したと聞
いた。私たちの班は、飯高恒夫さ
んがインスタラクションにあたり
長治谷作業所跡へ上谷く杉尾峠く
櫃倉谷と歩く。

ウワズミサクラが白い花をたく
さんつけた作業所跡を出発して、
最初に目についたのは、芦生杉の
皮が無惨に剥がされたものであつ
た。いわゆるクマハギで、月の輪
熊の仕業である。熊が何の目的で
剥がしているかは不明で、森を伐

り生息地をせばめた人間に対する
嫌がらせであろうか。関東、東北
に棲む熊にはこの習性はないよう
で、理解できない現象に困ってい
るといふ。

野田畑湿原には、天然にはある
はずのない大きなクロマツが芦生
杉の間に残っている。ここは、か
つて木地師が居住したところで、
通称杓子平という桃源郷だったと
いわれている。明らかに人が手を
かけた森であり、周辺の自然林と
比較して観察ができる場所である。
上谷にはブナ、トチ、カツラの巨
木が続く、典型的な溪畔林が杉尾
峠まで続いていた。

櫃倉谷の、沢沿いに生えた巨大
なミズナラは樹齢500年くらい
で、一部が枯れて、木の上にフジ、
カエデなどが着生していて大地の
ようであった。この谷の中流部の
岩の上には、ほかの植物が侵入で
きないためカスナロが茂ってい
た。別の岩場にはシヤクナゲの大
木が繁茂している。中ノツボ谷と
櫃倉谷の出合周辺に見られるニツ
コウキスゲは、ここが日本の西限
とされているそう。櫃倉谷はみ
ごとな溪流で、シダ類をはじめ植
物の多様性は素晴らしいのひと言

に尽きる。

芦生の森の価値は、次の2点に
あると思う。ひとつは遺伝子の宝
庫であること。冷温帯と暖温帯が
標高600mを境に同居し、日本
海気候と太平洋気候の要素が重複
する。つまり4つの気候が重なる
ため、植物の種類が多い。いわば
植生多重である。ふたつめは人間
の心に畏れを与える森の気が森
に宿っていることである。人間は
自然の中に生かされていることが
この森を歩くとわかる気がする。
今回の勉強会は学ぶことが多く
貴重な体験であった。



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーや
エクスペディションのアレンジまで。充実
度が違う「旅」のプランニングをこちらが
取ります。山旅などあらゆるジャンルを
取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 **アトラストレック**
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京 / 〒160-0008 東京都新宿区三栄町23 TEL 03-3341-0030
大阪 / 〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋 / 〒464-0807 名古屋区千種区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422



図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

『The Himalayan Journal』 Vol.57 2001

ヒマラヤンクラブ年一回発行の機関誌である。21世紀の始まりらしく、クラブにおける「ミレニアム記念講演録」を巻頭にもつてきた。

編集長のカバデア氏が地の利を生かして活躍している、インドヒマラヤでの初登頂と未踏地探検記。人類初の8000峰アンナプルナ初登頂時の、フランス隊員だつたりオネル・トレイの息子ニコラス・トレイが隊長をつとめるシャモニー・ガイド隊による、アンナプルナ50周年記念登山が興味深い。邦人の登攀では山野井泰史氏のK2無酸素ソロ登頂、早大のチヨ

ン・ムスターグ、JAC東海支部のスピテイでの初登頂など、立派な活動が目につく。

吉永定雄氏の「ネパールの知られざる山群探検」、中村保氏「カンリ・ガルボ」、山森欣一氏「中国登山20年」は世界の岳人たちの注目を集めることだろう。

全42項目の中で日本からの情報が12項もあり、追悼、書評にも邦人名が見られる。ようやくわが国の山岳界が、情報発信国に仲間入りした感じがうかがえて嬉しい限りだ。

(南井英弘)

発行 THE HIMALAYAN CLUB
292ページ

手塚宗求・著 『山―孤独と夜』

―小さな山小屋に暮らして―
45年にわたる山小屋での生活のなかから生まれた事象を題材にしたエッセイ集です。

題名が示すとおり、著者は霧ヶ峰車山の肩に建つ、通年営業の山小屋としては日本最小の山小屋「コロボックル・ヒュッテ」の主人として過ごしています。

小さな山小屋ならではの客との対話、小屋周辺を含む霧ヶ峰に住

今年もさくらんぼで会いましょう

む動植物の話、小屋で使われている新ストーブの話、その上で湯気を立てている大きな薬缶の話、NHKの「ラジオ深夜便」という放送番組の話、場所がら有料道路を含む観光開発の歴史、今では失われてしまった往時の風物の話などが全15章にまとめられています。

著者はあとがきで「この本は早朝とか深夜の普通の人たちが眠っている時間に書いた文章が多い」と書いていますが、読み手の方も、夜ひとりで静かに読めばいつの間にか夜の山小屋のストーブのそばに居るような思いにさせてくれる本です。

(茂見 猛)

2001年12月 山と溪谷社発行
285ページ 1600円

山口耀久・著

『北八ッ彷徨』

『八ヶ岳挽歌』

かつてヘルマン・ヘッセの小説が「青春彷徨」の題名で岩波文庫の一冊になったとたんに日本へッセ・ブームが起った。戦後に彷徨の二文字が当用漢字から消

えてヘッセの小説の名が「郷愁」と変わったが、山口氏はこの二文字に執着した。

八ヶ岳北部を舞台とする若き日の登山から生まれた魅力豊かな文は、物理的で肉体的な彷徨の記録に、情感に満ちた心の彷徨を織りませたものの好例として今なおその価値を失わない。その「北八ッ彷徨」が40年余を経て装い新たによみがえるとともに、続編である『八ヶ岳挽歌』が出版された。

「八ヶ岳はいい山である」という文で『北八ッ彷徨』が始まる。見て美しく、登れば静寂さも適度に憂鬱な詩情もあり、冬ともなれば強風の中で氷雪を相手に、真剣な戯れをする場面も欠けてはいない。清楚でもの静かな娘がときどき見せるヒステリーさえもが魅惑をつのらせる。

『彷徨』に描かれた世界は、そんな山を舞台とする著者の青春時代あるいは青春後期の、人と山の間的心情的な関係を展開させる世界であり、山岳と文学のしあわせな関係を心ゆくまで堪能させてくれ

る世界でもあった。そのような、まだ積雪期や残雪期の沢筋で初登攀を行う余地のあった時期に、獨標登高会の仲間たちとともに権現沢の滝場に挑んだ時の記録と回想が『挽歌』の中でもっとも躍動に満ちた章である。だが、遭難死した岳友を悼む詩が「挽歌」の題で挿入されている。

このダイナミックな章のあと、森や道や峠を語り、人と土地の歴史を語りながら、本書そのものが挽歌の名にふさわしい調子を強めていく。北八ツの美しさや深い味わいを語る文のすべてが過去時称でつづられるようになる。便利で大衆的な山になり、あらずもがなのロープウェイが建設されるに及んで、魅了してきたものの喪失を嘆かずにはいられない思いが頂点に達する。だが、美しさの記憶を美しいままに脳裡にとどめ、今なお残影を探し求めることのできる筆者がうらやましくも思えてくる。記録と文学のみごとな調和に私は敬服する。

『北八ツ彷徨』 2001年10月
269ページ 2800円
『八ヶ岳挽歌』 2001年12月
386ページ 3000円

ともに平凡社発行

北海道雪崩事故防止研究会・編
『決定版 雪崩学 雪山サバイバル 最新研究と事故分析』

本書は先に同研究会から1996年3月に出版された『最新雪崩学入門』の改訂版とも見られ、決定版としてこのたび2倍以上の内容で増補発行されたものである。まず序には、夜間、雪の降っているとき、樹齢10年以上の森の中など、巷で語られている雪崩対策を忘れ去って本書を読むことを提案している。

雪に関する科学的性質、とくに雪質を温度、湿度、降雪経過など細かく分類、雪崩発生の原因となる滑面層を追及し、発生のメカニズムを多方面から分析、雪崩の発生しそうな斜面でのルート取り方の図解など、実際に発生した雪崩を例にしながら解説している。救助対策として、被害者の早期発見を第一とすることから、ピーコン使用のすすめ、シャベル・ゾンデなどを利用した正しいレスキューのあり方や、雪崩発生と同時にヘリコプターでの迅速な出動が救命につながることを強く訴えて

いる。

今版ではスイスやカナダなど海外での雪崩対策の状況が記されている。とくにスイスでは雪崩犬を育成し、その導入と効果など10ページにわたって解説している。

巻末には北海道、北アルプス、富士山など全国18地区の山岳地帯で発生した雪崩記録が、1912年から1999年にいたるまで記載されており、本書出版にあたっての各方面からのデータ収集はみごとである。

「運が悪かった」ということにならないために、より詳しく雪崩を知ることと避けられることを示唆、冬山を楽しむ岳人、海外での雪崩対策の実情や雪崩について詳しく学びたい方などに、まさに雪崩に関する決定版としての一冊である。

(林 栄二)
2002年2月 山と溪谷社発行
350ページ 1900円

川越皓充・倉岡啓吉・共著

『北の三角点探訪』

第一集 第三集
一等三角点は全国に969点
が設置されている。一等点を訪ねる人たちは増加していて、今や登

山と旅のひとつのスタイルになりつつあるらしい。

北海道には島しょも含め224カ所に一等点が設置されているとのこと。登山家川越皓充(昭夫)氏は道内にくまなく散在する一等点を訪ねることを数年前に思い立ち、数人の仲間とすつかり熱中して、3冊の本にまとめた。現在の山名と一等点の名称が全くちがっているものが多く、地名の歴史としても興味深い。たとえば、富良野岳の一等点(本点)名は、神女徳岳などだ。

見開きの右頁の短文は登山記にとどまらず、青春の回想や屯田兵以来の開拓の歴史が語られていて「北海道風土記」として読める。左頁に一点ごとに描かれた倉岡氏の挿絵は旅ごころをそそる。残された50数点の踏破を目指す両氏のグループは近々、最終刊総集編を刊行する構想を練っているところだという。

(松沢 節夫)

第一集・1995年1月 2000円
第二集・1997年5月/第三集・2000年3月
各2500円 北海道アルパインサーピス発行 各104〜120ページ

会務報告

5月理事会

日時 5月8日(水) 18時30分～

20時40分

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 大塚会長、長尾、芳賀、村井各副会長、西村、高原、坂井、今村、朴元、宮下、松原、鈴木、黒川、高遠、鳥居、松原、大野、小川各理事、内田、古市各監事、平林、宮崎、宇田川、鯉坂各常任評議員

〔委任〕 藤本、河西、中村各理事

◎議事に先立ち、大塚会長より次々とおり挨拶があった。

明るい登山の話題が2件進展できたので協力をお願いしたい。

「東カラムル踏査・パドマナブ登山隊2002」は、待望の許可が5月2日に来た。明日9日出発。

「日中チヨール・オユー女子友好合同登山隊2002」が具体化してきたので本日審議をお願いしたい。

「100周年記念事業」について、5月18日の総会などでも会員に意見を聞きたい。「国際山岳年事業」は積極的に参画し盛り上げていきたい。7月の大雪山の自然保護全

国集会も成功させるよう、できるだけ多数参加いただきたい。

〔審議事項〕

1 「日中チヨール・オユー女子友好合同登山隊2002」について

別添資料により提案があった。 松原 (承認)

●中国側の当会への費用負担の要請は多額であるが、記念登山であり、個人負担金が100万円を切るように努力したい。

●女子の実行委員をもう1人追加したい。(長尾)

●支援隊(トレッキング)派遣も併せて検討したい。

●マスメディアの協力も可能性を検討したい。

●会のホームページで広報を行う。

●現在、チベット登山協会を窓口としているが、ある時点で中国登山協会をスムーズにかませるようしたい。(平林)

●当会で北京をしばらく訪ねていないので、会長、副会長で議定書の調印も含めて北京を訪問したい。

〔報告事項〕

1 各支部総会の概要

4月6日山陰支部(西村) 4月11日富山支部(大塚) 4月20日東

山のスケッチ賞 募集要項

アマチュアの愛好家を対象に山岳スケッチ作品を公募します。山を歩き、その美しい山容や自然を描いてもらうことで、私たちの生活を支える森林の大切さを考え、山岳自然を破壊することなく利用するための啓蒙活動の一助にしたいと考えています。



■審査委員

山里寿男(山岳画家) 加藤華子(作家) 田部井淳子(登山家)

■賞 最優秀賞1点・10万円/優秀賞2点・5万円/入選3点・3万円/佳作25点・1万円

■応募規定

- 作品は本人が描いた未発表作品に限ります。
- 8月までの過去2年間の山行をもとにした作品、国内外を問いません。
- 大きさはF4サイズ(33×24㌘)以下とします。
- 画法は油彩を除きます。
- 応募は1人1点までとします。
- 応募作品の著作権、出版権は主催者に帰属します。
- 応募作品は審査後、返却します。
- 上記規定に反した場合は受賞を取り消すことがあります。

■応募方法

応募作品の裏面に、タイトル、山名、制作年月日、住所、氏名、生年月日、職業または学校名、電話番号を明記した紙を貼り、事務手数料として300円分の定額小為替を同封してください。

■応募開始 8月20日(火)

■募集締切 10月15日(火) 必着

■入賞者発表

2003年1月中旬、読売新聞紙上にて

■応募・問い合わせ

〒104-8325 東京都中央区京橋2-9-2

読売新聞社事業開発部「山のスケッチ賞係」

TEL 03-5245-7092 (6月7日まで)

TEL 03-5159-5886 (6月10日以降)

(担当 近藤、長井)

■後援 (社)日本山岳会、山と溪谷社

海支部(芳賀) 4月20日山梨支部(今村) 4月24日関西支部(平林) 4月27日岐阜支部(朴元)

*東海支部からの要望 (芳賀) ローツェ南壁登山2003年冬を100周年記念事業に取りこんでほしい。

2 「東カラコルム踏査・パドマナブ登山隊2002」について 坂井

ようやく許可が来た。明日予定どおり出発する。

3 CS放送スカイパーフェクトVヒストリーチャンネル370への資料撮影許可について 西村
別添資料により報告。

4 長期改善計画策定プロジェクトの第1回検討会について 西村
5月25日、6月8日、半数ずつ2回にわけて実施。

5 各委員会報告
①会報編集委員会・今村
『山』5月号の巻頭は「Japanese Alpine News」 Vol.22(1)。

②遭難対策委員会・黒川
合同委員会報告ならびに山岳遭難事故合同調査の開始について別添資料により報告があった。調査は過去のものではなくこれからのものである。始めてみて地道にデ

ータを収集することとする。

③山研委員会 小川、西村
上高地旅館組合および環境省より、山研管理人・木村太郎氏へのインタビューライターおよびガイドウォークの依頼については、良い主旨なので実施する。山研委員会の事業というより、木村太郎氏にアイドルタイムにその時間を活かしてもらおうとする。実施状況を7月理事会で報告する。

④総務委員会 西村、高原
第5回秩父宮記念山岳賞の推薦を7月末までにお願ひしたい。

『新日本山岳誌』順調に進捗。5支部ですでに脱稿した。5月18日開催の支部長会議にも報告予定。

⑤財務委員会 村井副会長
平成14年4月度の会計報告が別添資料によりあった。

⑥科学、自然保護委員会 古市
別添資料のとおり「山のトイレマナー・ノート」の原稿がまとまった。

6 その他
アルパインフォトビデオクラブの山岳写真展の名義後援を了承。

■会員異動
物故

物故

中原 寛 (11308) 02・2・9	岩瀬時郎 (12038) 02・2・9	小畑恵布 (8028) 02・3・25	山田 暁 (11688) 02・5・13	黒田初子 (4442) 02・5・22	退会	金 正治 (2065) 海外	井上 文男 (4397) 京都	藤田 和夫 (4509) 関西	阿部 淳 (6408) 北海道	菅原 篤則 (6668) 北海道	湯川 龍二 (7296) 北海道	石崎 貞子 (7418) 北海道	吉村 和義 (7626) 福井	地木誠太郎 (8101) 関西	佐藤 勝子 (8213) 福井	辺見 幸恵 (9022) 京都	鈴木 真人 (9163) 京都	元木 陽子 (10138) 京都	辺見 金市 (10152) 福岡	藤本 幸一 (10366) 福岡	北村 皆雄 (10468) 福岡	津田 和巳 (10641) 福岡	古賀 正浩 (10225) 福岡	後藤 之俊 (11119) 熊本	白井 慎 (11262) 熊本	田中松三郎 (11445) 熊本	川口 央人 (12072) 石川	高橋 三郎 (12299) 石川	新井 宏司 (12486) 石川
---------------------	---------------------	---------------------	----------------------	---------------------	----	----------------	-----------------	-----------------	-----------------	------------------	------------------	------------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	-----------------	------------------	------------------	------------------	------------------

東京・関空発着、キリマンジャロ国際空港へ。
ホロンボ・ハット(3,720m)に2連泊して高所順応。

キリマンジャロゆったり登頂

●9/2●9/16発 10日間 ¥468,000

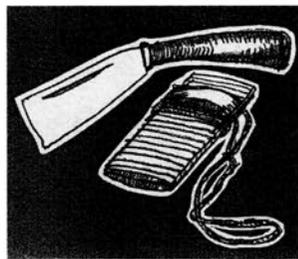
国土交通大臣登録旅行業第490号/社団法人日本旅行業協会正会員 ©JTF保証会員

ALPINE ツア サービス 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F TEL.03-3503-1911
大阪/TEL.06-6444-3033 名古屋/TEL.052-581-3211 福岡/TEL.092-715-1557

浅見 豊 (12508)	伊藤 靖彦 (12766)	福井 正明 (12849)	中村 憲司 (13138)	橋本 洋子 (13271) 宮崎	終身会員	橋本 祥案 (4375)	中村元次郎 (4969)	田中 外治 (5001)	岡村 治信 (5241)	田辺 昭雄 (5249)	高澤 光雄 (5308)	大須賀 浩 (5347)	上野 康二 (5362)	小浜 浩三 (5381)
--------------	---------------	---------------	---------------	------------------	------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------

INFORMATION



イラスト・宇都木慎一

◆プチ・オータム・コンサートと奥又白の池 山研運営委員会

演奏は昨年同様ヤーガ・ハイツスルの皆様です。チロル音楽とワインをご一緒に楽しみませんか。三連休ですので、翌日奥又白の池まででかける計画を立てています。期日 9月14(土)～16日(月) 費用 1万8千円(山研2泊4食・傷害保険料含む) 1万1千円(山研1泊2食・コンサート)

現地集合・解散

申込 8月末日までに住所・氏名・電話・会員番号を明記の上ハガキで井野千枝子宛(〒136-0076江東区南砂1-5-30・509) *申込者には詳細を送付します。 *山研小委員会では10月19(土)～20日(日)で焼岳登山を企画しています。

募集要項は次号にて。

◆講演会(第34回山岳図書を語る夕べ)を兼ねる

資料委員会・図書委員会

日本山岳会の誕生に大きな影響を与えたジョン・ラスキンとはどのような人物だったのか。ウエストン、志賀重昂、小島烏水、横有恒、田口二郎といった面々が登場。彼らはラスキンの何に惹かれたのか。 演目 ラスキンとアルプス(ウェストンと小島烏水を結びつけたもの)

日時 9月20日(金) 19時から

場所 日本山岳会集会所

講師 宮下 啓三(慶応大学名誉教授・日本山岳会理事)

連絡先 溝口洋三(Tel 03-33264-3813)

◆知床三山紅葉山行の集い 集委員会・北海道支部共催

日程 9月26(木)～29日(日)

26日 羽田―女満別―岩尾別温泉泊

27日 羅臼岳登山・斜里泊

28日 斜里岳登山・阿寒温泉泊

29日 雌阿寒岳登山―女満別―羽田(解散) 費用 9万5千円(往復航空運賃・バス代・3泊6食込み)

行動食各自持参・現地参加者(会費別途)

定員 先着35名 申込 9月5日までに氏名・会員番号・住所・電話・FAX・メールを記入し、ハガキかFAXにて勝山康雄宛(〒334-0057 川口市安行原1262-35 FAX 048-294-9646)

*申込者には詳細案内を送ります。

◆第9回上高地インタープリテーション 山の自然学研究会

上高地の自然のすばらしさ、大切さを知ってもらうために、今年もミニトークとガイドウォークを行います。

期間 8月3(土)～18日(金)の16日間(ミニトーク)

時間 19時半から約1時間

場所 温泉ホテル、村営ホテル、西糸屋会議室・ロビーなど

内容 上高地の自然に関する話

*山研などに宿泊の方もお立ち寄りください。

(ガイドウォーク)

時間 9時頃出発

内容 明神、岳沢、焼岳方面へ自然観察をしながらご案内し

ます。

申込 事務局関まで(FAX 03-3706-7941)またはミニトーク会場にて

*ミニトークの内容を載せた研究報告書「やまの自然」を7月に発行しました。興味のある方は編集担当船橋まで(FAX 0467-3213011)

◆上高地山研で第2回「山のスケッチ展」開催

アルパインスケッチクラブ

素晴らしい秋の季節の上高地でご来場をお待ちしています。

開催日 9月7(土)～10月14日(日)

時間 9時より16時まで

会場 上高地山岳研究所・資料室

作品数 約30点

問合せ 笠原健二郎(Tel 045-753-1274)

*原則として水曜日は休みです。

◆氷河公園の实地研修山行 山の自然学研究会

檜沢・天狗原は氷河作用が顕著に現れた氷河公園、錦秋のすばらしい山岳美を楽しむことができる。 期日 9月20(金)～22日(日) 集合 20日7時30分山研 8時出発(前夜泊も可) 行程 山研―徳沢―檜沢ロッジ

ビールパーティのお知らせ

総務委員会

恒例のビールパーティを開催します。例年土曜日に行っていましたが、今年は平日水曜日です。今まで山行で出席できなかった方も是非お仕事帰りにお立ち寄りください。

楽しかった夏山の話をかかんに、楽しいひとときを過ごしましょう。ビール飲み放題。差し入れ歓迎です。

日時 9月4日(水)

場所 日本山岳会ルーム

会費 2000円

申込みは8月23日(金)までにTel、Fax、メールで事務局へ。

この機会にご意見拝聴。

同期の親睦と情報交換会です。

96同期会

◆上高地山研で懇親会

32・30011)

申込 9月10日までにファックスで船橋明宛 (FAX 0467・

各自加入のこと。

保険 山岳保険に加入していない人は「上高地山岳保険」に

男・説明員 船橋明

同行 L大船武彦・S L末松日出

定員 12名まで

程度 健脚向・初冬登山装備

泊代)

費用 実費2万円(資料配付・宿

屋跡―横尾―上高地(解散)

―横尾山荘(泊)―横尾岩小

(泊)―天狗原・水河公園

*入場は無料です。

9600)

担当 関次 (TEL 03・3784・

場所 上高地山岳研究所展示室

期日 7月7日(日)〜8月末

介。航空撮影による迫力ある山岳

展で好評の写真展を山研で再度紹

「北アルプスを翔ぶ」

資料委員会・山研運営委員会

昨年松本市アルプス山岳館特別

展で好評の写真展を山研で再度紹

介。航空撮影による迫力ある山岳

パノラマ写真をお楽しみください。

連絡先 福原サチ子 (TEL 03・3

29日 自由行動

昼食後山研へ。

合(現地直行も可) 駅前

日程 9月28(土)・29日(日)

28日 J R松本駅 11時集

ルーム日誌

5月

1日 会報編集委員会

7日 常務理事会 アルパイン

ケツチクラブ

8日 理事会 休山会 つくも

9日 集委員会 山の自然学研

究会 山岳地理クラブ

10日 学生部

13日 総務委員会 アルパイン

キークラブ

14日 二火会 アルパインスケ

ツチクラブ

15日 三水会 山研運営委員会

16日 科学委員会 アルパイン

フトクラブ 97同期会

20日 フィルムビデオ委員会 資

料委員会 青年部

21日 百年史委員会 自然保護委

員会 インターネット小委

員会 00同期会

22日 図書委員会

96同期会 98同期会

24日 自然保護委員会 トイレ小

委員会 01同期会

27日 集委員会 アルパイン

キークラブ

28日 自然保護委員会 95同期

29日 緑爽会

30日 青年部 アルパインスキー
クラブ 5月来室者 591名

■訂正 6月(685)号22ペー

ジ2段1行全国支部懇談会申込の

電話は082・296・0996

の誤りでした。お詫びして訂正し

ます。なお、ファックスは同29

6・0997、自宅電話とファッ

クスは同927・4040です。

◆編集後記◆

●今月号巻頭の渡邊さんの淡々と

した気負いのない登頂記には感動

しました。

●日印合同「パドマナブ登山隊」

も無事初登頂して帰国しました。

インド・パキスタンの緊張状態を

一時心配しましたが、カラコルム

峠やシアチェン氷河などの写真や

報告が楽しみです。(今村千秋)

日本山岳会会報 山 686号

2002年(平成14年)7月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

ホームページ:http://www.jac.or.jp

E-メール:jac-info@jac.or.jp

発行者 大塚博美

編集人 今村千秋

印刷 株式会社 双陽社